

新版 指導要文集

しんぱん

しどうようもんしゅう

だいにししょう

じっせん

第二章 実践

じぞく

持続

「この経は持ち難し。もししばらくも持たば、我は即ち  
歡喜す。諸仏もまたしかなり。かくのごときの人ひとは、諸仏  
の歎めたもうところなり」云々。日蓮讚歎したてまつるこ  
とはもののかずならず。「諸仏の歎めたもうところなり」  
と見えたり。あらたのもしや、あらたのもしやと、信心を  
ふかくとり給うべし、信心をふかくとり給うべし。

(191 四条金吾殿御書)

持続 1515 ページ 9 行

ほけきよう しんじん 通 たま ひ 切 休  
法華經の信心をともし給え。火をきるに、やすみぬれば火  
得  
をえず。

(194 四条金吾殿御返事 (煩惱即菩提の事)  
しじょうきんごどのごへんじ ぼんのうそくぼだい こと

持続 1522 ページ 13 行  
じぞく

ほけきよう しんじん つらぬ とお ひう いし ひ  
法華經の信心を貫き通していきなさい。火打ち石で火をつけるの  
とちゆう やす ひ え  
に、途中で休んでしまえば火を得られません。

きよう 聞 受 ひと おお

この経をきききうくる人は多し。まことに聞き受くること

だいなんきた

おくじふもう

ひと

まれ

くに大難来れども憶持不忘の人は希なるなり。

う 易

たも

難

じようぶつ

受くるはやすく、持つはかたし。さるあいだ、成仏は

たも

持つにあり。

199

（四条金吾殿御返事

（此経難持の事）

しじようきんごどのごへんじ

しきようなんじ こと

じぞく  
持続 1544 ページ 11 行

ほけきよう

き

う

ひと

おお

法華経を聞いて受ける人は多くいます。しかし、聞いて信受し、

きようもん

だいなん

ほけきよう

おも

たも

わす

ひと

经文どおりに大難がきても、法華経を憶い持って忘れない人はま

ごほんぞん

う

たも

れなのです。御本尊を受けることはやさしいのですが、持ちつづける

ことはむずかしいのです。それゆえに成仏じょうぶつする肝要かんようは、持ちつづけたもることにあります。

たびたび なん にかど ごかんき こころ

度々の難、二箇度の御勘気に心ざしをあらわし給うだに

ふしぎ

も不思議なるに、かくおどさるるに、二所の所領をすて

脅

にしよ

しよりよう

捨

ほけきよう

しん

通

ごきしろうそうろう

て法華経を信じとおすべしと御起請候こと、いかにとも

もう

申すばかりなし。

(208 四条金吾殿御返事

しじょうきんごどのごへんじ

(不可惜所領の事)

ふかしゃくしよりよう

こと

じぞく

持続 1582 ページ 14 行

だいもく

とな

ひと

によらい

つか

しちゆうじゆう 捨

題目を唱うる人、

如来の使いなり。

始中終すてずして

だいなん

通

ひと

によらい

つか

大難をとおす人、

如来の使いなり。

(218

四条金吾殿御返事

(源遠流長の事)

しじょうきんごどのごへんじ

げんおんりゆうちよう

こと

じぞく

持続

1616

ページー17行)

つきづきひび 強 たま 月々日々につより給え。すこしもたゆむ心あらば、ま 魔  
便 得 たよりをうべし。

(219) 聖人御難事 しょうにんごなんじ

じぞく 持続 1620 ページ 7 行

つきづき ひび しんじん つよ 月々、日々に信心を強くしていきなさい。少すこしでもゆるむ心こころが  
ま あれば魔がそれをいいチャンスにして、しのびよってくるにちがいあ  
りません。

いちにちかたとき 弛  
一日片時もたゆむことなくよばわりし故に、  
かかると大難に  
遭  
あえり。

(  
246 弥源太殿御返事  
やげんたどのごへんじ

持続 じぞく  
1698 ページ 9 行

ひと み がんぜん こころ あ 差 離 こころ  
人は見る眼前には心ざし有りとも、さしはなれぬれば心

忘 そろろ  
はわすれずともさてこそ候

265 千日尼御前御返事 (眞実報恩経の事)

せんにあまごせんごへんじ

しんじつほうおんぎよう こと

じぞく  
持続 1742 ページ 3 行

そもそも、今の時いま とき、法華経を信しんずる人ひとあり。あるいは火ひの  
ごとく信しんずる人ひともあり、あるいは水みずのごとく信しんずる人ひともあ  
り。聴聞ちようもんする時ときはもえたつばかりおもえどもとおざかり遠  
ぬればすつる心こころあり。水みずのごとくと申もうすは、いつもたい退  
せず信しんずるなり。これは、いかなる時ときも、つねはたい常せ退ず  
とわせ給たまえば、水みずのごとく信しんぜさせ給たまえるか。とうとし尊、  
とうとし。

314 上野殿御返事うえのどのごへんじ (水火二信抄すいかにしんしょう)

いま じだい ほけきょう ごほんぞん しん ひと  
それにしても、今の時代に、法華経（御本尊）を信ずる人がいます

ひ も しん ひと みず  
が、そのなかには火が燃えるように信ずる人もあり、あるいは水が

なが しん ひと ぶつぼう はなし き ひ  
流れるように信ずる人もいます。仏法の話聞いたときには、火

も しんじん おも とお しんじん す  
が燃えあがるように信心をしようと思っても、遠ざかると信心を捨

こころ みず しんじん  
てようとする心がおきてしまうものなのです。水のような信心とい

みず なが た おな たいてん  
うのは、水の流れが絶えないのと同じように、いつも退転すること

しんじん はげ うえのどの  
がなく信心に励むことをいうのです。あなた（上野殿）は、どのよ

とき おな しんじん もと みず なが  
うな時でもいつも同じように信心を求めてこられるので、水の流れ

しんじん とうて  
るような信心をなさっているのです。ほんとうに尊いことで

す。

ほけきよう  
法華経は、  
はじ  
初めは信ずるようなれども、  
しん  
後のちと遂とぐることかた  
難  
し。  
たと  
譬えば、  
みず  
水みずの風かせにう動ご動き、  
はな  
花はなの色いろの露つゆに移うつるがごと  
し。

382  
まつのどののにようぼうごへんじ  
松野殿女房御返事  
ちようしんぶつじゆう  
（澄心仏住の事）  
こと

じぞく  
持続  
2007  
ページー6行

みなひと

きょう

しん

はじ

とき

しんじんあ

み

そうろう

皆人のこの経を信じ始むる時は信心有るように見え候

なか

しんじん

弱

そう

くぎょう

くよう

が、中ほどは信心もよわく、僧をも恭敬せず、供養をもな

じまん

あつけん

おそ

おそ

はじ

さず、自慢して悪見をなす。これ恐るべし、恐るべし。始

お

しんじん

めより終わりまで、いよいよ信心をいたすべし。さなくし

こうかい

たと

かまくら

きょう

て、後悔やあらんずらん。譬えば、鎌倉より京へは

じゅうにち

みち

じゅういちにちあま

あゆ

運

いま

十二日の道なり。それを十一日余り歩みをはこびて、今

いちにち

な

あゆ

差

置

なん

みやこ

つき

一日に成つて歩みをさしおきては、何として都の月をば

なが

そうろう

なん

きょう

こころ

知

そう

ちか

詠め候べき。何としてもこの経の心をしれる僧に近づ

ほう

どうり

ちようもん

しんじん

あゆ

はこ

き、いよいよ法の道理を聴聞して、信心の歩みを運ぶべ

し。

（  
400 新池御書  
にいけごしよ

じぞく  
持続 2063 ページー12行  
)

だれでもこの妙法を信じ始めたときは信心があるように見えま  
み

すが、中間では信心も弱くなり、僧（法華經の行者）を尊敬せ  
み

ず、供養もしないで、慢心を起こして悪い考えを抱くのです。これ  
お

は実に恐るべきことです。はじめより終わりまで、ますます信心を  
お

まっとうしていきなさい。そうでないと後悔することでしょう。たと  
こ

えば、鎌倉から京までは十二日の道のりです。それを十一日あ  
じ

ある

いちにち

とき

ある

まり歩いて、あと一日となった時に歩くのをやめたのでは、どうし

きょうと つき

て京都の月をながめることができましようか。なんとしても、この

きょう ほけきょう ごほんぞん

こころ し

そう ちか

経（法華経、御本尊）の心を知っている僧に近づいて、ますます

ぶつぼう どうり き

しんじん

あゆ すす

仏法の道理を聞いて、信心の歩みを進めていきなさい。